書評　著者の椅子-中国問題は今世紀の文明的課題　株式市場新聞-1982.07.14

株式市場新聞　昭和57年(1982年)7月14日　(水曜日)　《4》
(第3種郵便物認可)

新著「中国」歴史・社会・国際関係」(中公新書、定価四八〇円、昭和五七年五月発行)を出版した東京外国語大学教授で社会学博士の中嶋嶺雄氏を訪ねた。中嶋氏は現代中国研究の第一人者であり、冷徹な学問の眼に裏打ちされた的確な指摘は定評のあるところ。その好例が多くの中国研究者が単純な讃美論に終始した文革時にも冷静さを失わず、大胆で客観的な批評を行なったこと。著書は一九六四年の「現代中国論」から一九八一年の「北京烈烈」まで多数に及んでいるが、今回の新著は「日ごろ私が考えている中国問題のすべてを語ってみたい」、「この一冊を読めば現代中国をめぐる諸問題がほぼ網羅的に解明できるというような本がわが国にも欲しい」という気持から書かれたもので、多くの問題をかかえた巨大な隣国である現代中国への格好の入門書となっている。記述はやさしく平明で要点をついており、一般読者にも読みやすい。中国に関する文献は讃美論が攻撃論にかたよりがちであり、くもりない眼でかかれた入門書として得がたい本である。構成は序章、中国認識の座標、第一章、中国社会の特質、第二章、革命と伝統、第三章、中国革命の軌跡、第四章、中華人民共和国の歩み、第五章、中ソ対立と現代、第六章、米中関係の歴史的展開、第七章、アジアの現実と中国、第八章、日中関係の過去と現在、終章、現代中国の課題となっている。

中国問題は今世紀の文明的課題

「中国の中嶋嶺雄」

——中国に関する本が数多く出ている中で、今回新しく本を出版された動機は。

中嶋　中国に関しては個別の分野では確かにたくさん出ているが、これ一冊を読めば中国問題がわかるという便利な本が少なかった。それに、中国の政治、社会の変動ですぐに時代遅れになる本が多い。だから、時間に耐え得る展望で書いてみたかった。

——この本を読みますと、中国のかかえている問題の大きさ、解決の困難さを痛感させられますが……。

中嶋　中国問題は今世紀の文明の課題ともいえる大きな問題であり、カネさえつぎ込めば変化するというような簡単な問題ではないし、もっと基本的に考えてみる必要がある。果たして工業社会に適応し得るのかどうかという疑問すらある。ひとつの例が、華僑で「東洋のユダヤ人」といわれるほど商業民族としてはすぐれているが、工業生産によって付加価値を増大させていくことに中国民族は適していないのではないかとさえ思えてくる。近代化資金の面でも巨額を要する。日本の六〇億ドルを含め西側の資金協力は一〇〇億ドルといわれているが、「四つの現代化」に要する資金の一〇分程度であり、中国全体では千天の慈雨に過ぎない。石油などの程度外貨を稼げるか。中国ブームというが、上海の宝山製鉄所のようなプラントを輸出しただけで工業化が達成されると考えては大まちがいだ。日本人はとかく中国に対し幻想を持ちがちで、万里の長城に典型的に示されるスケールの大きさを中国のバイタリティーと感ちがいしてしまう。しかし、これは旧中国の遺産に過ぎず、現代中国のつくったものを見て日本人がおどろくものはないはずだ。中国は四〇〇年の長い伝統の重みがあり、ここから新中国についても幻想があったが、新中国は政治、社会的に成果を残していない。

——序章「中国認識の座標」で中国分析の方法論に触れられていましたが。

中嶋　技術論としては人民日報の読み方など指摘できる（たとえば宣伝のメディアで支配的なグループの意見を反映したものに過ぎない、人口対発行部数比では二〇人に一部の割合であり中国社会全体を反映したものでないとか）が、もっと重要なことは問題意識をもつことで、常識で考えてみたらいい。たとえば造反有理が文革時いわれたが毛沢東自身は絶対化されて造反有理の対象にならなかったとか、すべてのあやまりを四人組のせいにする傾向があるがたった四人だけで中国をふりまわせるものではない、もっと制度的欠陥があるはずだとか……むという農業の原点に戻ることが必要ではないか。お祭りなどの活性化に役立つ習慣を復活するのもいい。そうすれば中国農民にももう少し活気が出てくるのではないか。これらが第二段階で、次は産業構造の転換が必要となろうが、大問題であり、ものすごい模索をしなければならない。現在のところ最適形態を求める大きな実験をやるまでに至っておらず、自由な発想を取り入れる必要がある。一〇億に及ぶ人口圧力などを考えると楽観的な見通しは持てず文明の問題でもある。アヘン戦争以来、中国はなぜ近代化できなかったのかという問題にまで立ち帰ることになる。中華思想への安住もあるし、システムの問題でもある。社会主義農業そのものが問われる日もいつかは来るのではないか。日本の対中協力も使いこなし切れない一点豪華主義の宝山製鉄所のようなものではなく、農業のインフラストラクチャーや交通網の整備などに力を入れた方がよい。

——近代化に成功した国、あるいは社会経済の発展した国は民主主義的な制度や精神が推進力になった面があると思いますが、中国の民主主義の問題点は。

中嶋　中国にはもともと民衆の権利を認める法体系はない。民主主義の構成要素はローマ法＝権利の法典にあり、近代市民社会の礎石となっているが、中国の法体系は権利を擁護する体系になっておらず、刑罰本位でいかに罰するかに主眼があり、民衆の対応もいかにこれをのがれるかになる。反政府的言論で簡単に懲役一五年（魏京生）とか四人組の裁判が例だが、中国では人権は抑圧され、我々のいう民権、自由はない。日本は明治維新以来文化革命をやったが、中国は本当の意味の文革をやっていないし、今こそ文革をやる必要があることに気がつかなければならない。中国に行くと人間の命が軽く見えるが、人間の尊厳さがもっと考えられなくてはならない。"四つの現代化"は富国強兵であり、「四つの現代化」ができても、中国社会全体が近代化されるかどうかは疑問だ。中国社会の構成は党官僚と農民層に二分され家産官僚制という中国の伝統を受けついでいる。現在までのところ中国の伝統と社会主義両方のマイナスが結びついている格好だ。

——現在、実権を握っている大物の鄧小平が死ねばまた大混乱におちいるとの見方もありますが。

中嶋　党官僚独裁の強化から反対運動がおこる要素はあるが、文革のような大混乱は二度とおこらないのではないか。社会主義の枠組を取るかぎり、ひとまわりまわってソ連を追い、社会の体質がソ連に似てくるだろう。沿岸諸州がホンコン化すればひとつの展開要因だが、社会主義と抵触するはずで、今後の見どころといえる。一部には強硬派、現在の路線が崩れるとの見方もあるが「貧困のユートピア」を夢みた毛沢東型「革命」では大衆を二度と熱狂させられず、経済再建に進む以外に選択はなく、現在の路線を進めざるを得ない。その意味で、中国政治は一九七五～七八年の歴史的な転換期をへて、もはや「穏歩」と「急進」の循環をこれまでのようにくり返しえない歴史的な転換をとげたと見ており、従来のように大きな政治変動の振幅をくり返しても惜しくないために失敗するのは、なんとしても惜しい気がする」という著者の問題意識が、さりげなく語られる箇所である。

——では家相はどう判断したらよいのか。本書は初心者にも家相が解りやすいように図形入りで書かれており、その上職業別の秘訣集の章が設けられ懇切丁寧な入門書となっている。一読の価値がある。（新書判、立風書房、六八〇円）

中嶋　毛沢東思想について。

——先生の中国研究のキッカケはどんなところから？

中嶋　一九五〇年代に周恩来の平和五原則外交など中国がチャンピオンとして自ら乗じ見えたことから中国に関心を持った。しかし、反右派闘争による弾圧、人民公社、中ソ紛争などには疑問を持った。中国のやることをうたうことは罪悪というムードがあったが、私の中国研究はうたがうことから始まった。文革の時も現地に飛んで、これはダメだ、こんなことがうまく行くはずがないと思った。パーソナル・ヒストリーからは〝ミニ文革〟とも言える大学紛争の矢面に自分自身たたされ文革と同じようなパターンだなと思え、自分の視点が定まった。

著者の椅子

中嶋嶺雄著　新書判、中央公論社、480円

話題の新刊

天皇陛下の経済学
B・A・シロニー著

「日本論」、「日本人論」がブームになっているが、本書は類書とは全く異る新しい視点から「日本」を問い直し、本質に迫った労作である。著者は、ヘブライ大学で日本史を講ずる学究であり、その専門分野から展開した「天皇側」の機能と効用こそが、経済大国・日本の原動力となったとする論旨は、説得力に富んでいる。

世界史には、これまでダビデ王、ソロモン大帝などと、強大な君主が登場したが、いずれもその王朝は滅び去った。ところが日本の天皇家だけが唯一生き残っており、その理由は、というのが著者の問題提起である。「天皇」が日本の文化の本質である「抑制の文化」を象徴し、エネルギーの解放と抑制の間の振り子運動のなかで、不動の核としてとどまっていたことが今日の日本の繁栄をもたらしたとの結論になっている。

貿易摩擦が大きな問題となっているが、今後の日本の進路についても、歴史論に基づいた傾聴に値する示唆を与えてくれる。

（新書判、光文社、六五〇円）

商売の家相
鶴野　晴山著

まず、「経営の神様」松下幸之助と栗田工業のエピソードが書かれている。会社、工場や経営者の自宅の家相が、その会社の運、不運につながるという実例である。

「経営能力がなく、人を使うのも下手な怠慢な経営者が事業で失敗するのは、自業自得である。しかし、才覚がありながら家相がわるいために失敗するのは、なんとしても惜しい気がする」という著者の問題意識が、さりげなく語られる箇所である。

では家相はどう判断したらよいのか。本書は初心者にも家相が解りやすいように図形入りで書かれており、その上職業別の秘訣集の章が設けられ懇切丁寧な入門書となっている。一読の価値がある。（新書判、立風書房、六八〇円）

——伝統と社会主義——
両方の欠点結びつく
農業の再編と最適形態発見がカギ

ビストセラー

ビジネス書（6月16～30日）
一千代田書店・茅場町店調べ一

①先端技術 100の常識
日本経済新聞社（日本経済新聞社） 980円
②兜町の体験
柴川志郎ほか（かや書房） 1,300円
③情報を読む・経済を見抜く
長谷川慶太郎（PHP研究所） 680円
④QCのことがわかる本
松田亀松（日本実業出版社） 980円
⑤オフコン・パソコン導入活用マニュアル
藤井琪一（日本実業出版社） 1,300円
⑥改正商法の日程別対応策
並木俊守（中央経済社） 1,500円
⑦上司を上手にのせる法
山際有文（東洋経済新報社） 980円
⑧なぜ売れないのか
伊吹　卓（PHP研究所） 980円
⑨ビジネスマンのポケコン入門
西順一郎ほか（ソーテック社） 1,000円
⑩マネー戦争
野口　恒（大陸書房） 1,200円

ビジネス書（7月5～10日）
一八重州ブックセンター調べ一

①誰にでもわかるTQCのはなし
石川　馨（鹿島出版会） 680円
②企業会計規則集
大蔵省証券局企業財務課（税務研究会出版局） 2,000円
③人間における勝負の研究
米長　邦雄（祥伝社） 680円
④図でみる中小企業白書57年版
中小企業庁（同友館） 870円
⑤外国為替の話
足立禎（東洋経済新報社） 1,000円
⑥経営の行動指針
土光　敏夫（産業能率大学） 900円
⑦金融革命の中核　短期金融市場
日本経済新聞社（日本経済新聞社） 1,500円
⑧商法改正に伴う法務省令の実務
窪内　義正（商事法務研究会） 2,000円
⑨日本的品質管理
石川　馨（日科技連出版社） 1,600円
⑩先端技術100の常識
日本経済新聞社（日本経済新聞社） 980円